



【表紙】

宿屋の前の旅人たち
イサーク・ファン・オスターゼ

解説は27ページ

題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

冷泉家の文化財 ……………坂本 太郎 4

特別展「正倉院宝物」を顧みて
……………濱田 隆 6

随 想

仲直りのすすめ ……………小林 善彦 8

報 告

ケルン・ベルリン・チューリヒ
……………金沢 弘 10

文化庁ニュース

昭和56年度(第36回)芸術祭芸術祭大賞・ 同優秀賞決まる……………	13
第6期著作権審議会発足……………	15
第28回文化財防火デー……………	15
重要文化財(建造物)の新指定……………	16
重要伝統的建造物群保存地区の新選定……………	18
北大第二農場建造物の保存修理終る……………	18
文化庁企画・提供 「美をもとめて」の2月の放送予定……………	20

【展覧会】 特別展 現代の食器——注ぐ……………21

アジアの心をむすぶ……………28

英文「MOMBUSHO」を刊行……………30

我が県の文化行政——徳島県の文化行政——
豊かな地域文化の振興をめざして
……………川人 幸夫 22

【国語シリーズ⑨】 「漢字の意味」に関する問題 26

【新設法人紹介】 (社)全日本菊花連盟……………19

【祭礼歳時記シリーズ⑳】 25 国立劇場ニュース 31

冷泉家の文化財



坂本 太郎

(東京大学名誉教授)

埋蔵文化財では、高松塚古墳壁画の発見とか、稲荷山古墳鉄銘文の解読とか、太安万侶墓誌の発掘とか、この所毎年のようにセンセーショナルな遺物遺跡の出現が報告されるが、文献ではそういう花々しいニュースはない。社寺旧家の記録文書は一応調べつくされた感があるので、よくよくのことがない限り新しい発見は期待されないと思っていた。

ところが、そのよくよくのことが、昭和五十五年冷泉家の秘庫開扉という思いもかけぬニュースとなって、日本中を駆けめぐったから、人びとの驚きは絶大であった。中でもこの秘庫の内容に、かなわぬ夢を抱いていた国史国文の学者の喜びはたとえようもなかった。私もそのひとりである。かつて史料編纂所長在職中、所員の希望もあって、何とか拝見許可を取り付けら

れぬものかと関係方面に接触したが、不調に終わったこともあったので、ひとしお身にしてみても、この喜びをかみしめた。

調査は平安博物館の角田文衛氏を主班とする館員諸氏の努力によって進められ、早くも明月記五十六巻、定家自筆の拾遺愚草、藤原為家自筆譲状四通、永仁五年書写の豊後風土記などのバラエティに富んだ記録、文書、典籍の存在が確認されて、さすがに期待にたがわぬ古文庫の宝庫であると人びとを喜ばせた。

もともと冷泉家の当主為任氏が秘庫の開扉に踏みきったのは、時勢にかんがみ、歴代の宝物を公開して学界に役立たせると共に、永久の保存を強力な機関によって図ろうという点にあった。当然そのために財団法人の組織作りが考えられた。発起人会は五十五年から五十六年にか

ことは、国文学者の大きな喜びであらう。

定家は後世歌聖と仰がれ、冷泉家の家学は和歌であるから、秘蔵された典籍が和歌に関するものが多いのは当然である。しかし、それ以外の文書典籍で、歴史の徴証として貴重なものも少なくない。

その類で第一に挙げるべきものは、定家の日記明月記である。定家は十九歳から八十歳くらいまで日記を書き続け、その量は百十巻に達するという。鎌倉時代初期における公家社会の微妙な空気や和歌を中心とする文化的事象などを知るには、これにまさる史料はない。古来名記としてその名が高いが、早くから原本の一部が世間に出て、断簡零墨といえども好事家の珍藏する所となった。その所在を調査した辻彦三郎氏の著書によると、あるいは一巻あるいは数行と分れて所在の知られるものが百七十二点に及ぶという。今回は冷泉家に残された五十六巻が世に出たのであるから、これまで写本や推測によって構成した明月記像を完全に確認することができるのである。

定家の子息為家の自筆譲状四通も冷泉家の所領や記録文書の伝領に関する貴重な根本史料である。明月記は為家が譲り受け、為家はそれを後妻阿仏尼の生んだ為相に譲ったが、そのことの証として上記辻氏の著書では保阪潤治氏所蔵の為家譲状案を挙げている。それは二通が一紙に書かれ、前半の一通は宛所を欠き、後半の一

けて何回か開かれ、設立の趣旨、役員を選定、基本財産の調達など一通りの作業が順調に進み、五十五年四月、財団法人冷泉家時雨亭文庫の設立が認可された。

財団の寄付行為の目的には、「公家屋敷である冷泉家の建物及びその環境並びに冷泉家伝来の典籍及び古文書類の保存及び活用を図るとともに、冷泉流歌道と関連諸行事を継承保存し、公開し、及び普及を行い、地域の伝統文化の振興、学術文化の発展に寄与することを目的とする」とあるように、財団が保存を図る対象は、典籍文書だけには限らない。現存する唯一の公家屋敷として冷泉家の建物も重視されている。

京都御所と今出川通を隔てた北側に、同志社大学の近代建築の間に包まれるように、ひっそりと静まる冷泉家の邸宅は、本瓦葺の表門に切妻作りの玄閣、入母屋作りの座敷、切妻作りの台所などから成り、いかにも公家の邸らしい悠揚迫らぬ趣を呈している。それにしても玄閣の式台は並みの家のそれよりかなり高かった。第一回発起人会の際、機智に富んだ入江相政氏は、「敷居が高いとはこのことですな」と言ってみんなを笑わせたが、まさにその高かった敷居を私も庶民も昇ることのできるようになった喜びを改めてしみじみと感じた。この建物は五十六年十一月に開かれた文化財保護審議会で住宅建築として、国の文化財に指定するよう答申せられた。

通は侍従殿と記して為相であってになっている。辻氏は、為相は当時十歳の少年であり、異腹の長子為氏をさしおいての譲渡であるから、この譲状は恐らく母の阿仏尼にあてたものであり、後半の侍従殿の宛所は、案を書写したさいの加筆かと推測している。ところが自筆譲状を見れば、案文が宛所を欠いている前半も「阿仏御房へ」と宛所を記し、後半も「侍従殿」とあって、加筆ではない。ただ年月日が案文とはちがう。この相異については、今後の検討を要するが、この自筆譲状の原本が発見された意義は大きい。

譲状は所領に関しても重要な事項を記している。伊勢国小阿賀賀御厨の預所職、播磨国細川荘の地頭職を阿仏尼に譲り、やがて為相に渡すべきこと、嵯峨中院の地を為相に譲ることなど、一人一人為氏に譲ったものを、悔い返して改めて為相に与えるという、かなり無理な内容である。時に為家は七十歳を超えた老齢である。幼少の為相への偏愛におぼれた心の動揺が、しどけない筆跡にあふれ出て、あわれさを覚える。しかし、これが冷泉家が歌道の家として存続した基盤になつていると思えば、冷泉家にとつては貴重きわまりない証拠書類である。

こうした宝物類を一々述べていたらきりはない。今後の課題は、これらの貴重な文化財を研究活用することはもとより、その保存についてはこれまで以上の配慮を必要とするという私見を記して、この無文のしめくりとする。

一方、文書典籍についても、指定のための文化庁の調査が、五十六年七月と十月の二回にわたって行われ、多くの貴重な文化財が発見された。とくに第二回の調査で、定家自筆の古今和歌集、後撰和歌集の古写本が見出されたことは、国文学研究の上に大きな意義をもっている。古今和歌集には幾種もの系統の写本があるが、その中で定家の書写校訂した本が広く世に行われる。その定家本にも貞応二年(一一三三)書写本と嘉祿二年(一一三二)書写本の二種が名高い。貞応本は二条家に伝えられたものであるが古写本はない。嘉祿本は嘉祿二年四月九日定家書写の奥書があり、為家・為相と譲られた冷泉家伝来の秘本である。その嘉祿本の原本が発見されたのは、当然あるべきものであったとはいえず、古今集の本文研究に裨益する所ははかり知れない。

後撰和歌集にも諸本があるが、定家本はその中で大きな位置を占める。その定家本にも各年代の書写本があるが、そのうち天福二年(一一三三)本が定家の証本であったという。今度発見された定家自筆本は天福二年三月二日に書写し、同年四月藤原行成の筆写本をもって校合した旨を記した奥書をもち、さらにその末に為家が為相に対して譲与することが記されているという、正しく冷泉家の秘本である。天福二年本といっても、これまで転写本でしか用いることができなかったから、この自筆本が発見された

編集後記

○新年おめでとうございます。関東地方は好天に恵まれた初春でした。今年は戌年。十二支に鼠、牛、虎などのように動物をあてるようになったのは中国の後漢の頃からとか。成年生れの性格は「義務を守り、正直に、人のためには隠ひなたなし云々」(二兎神社暦)とあります。

○巻頭には、前文化財保護審議会会長の坂本太郎氏に、冷泉家の文化財について解説していただきました。現在、専門家による古文書等の調査が進められています。その成果が期待されます。なお、冷泉家住宅の文化財指定については十六ページをご覧ください。

○近年国際化の中で文化や情報の交流の必要性が一層高まっています。日本人と外国人の行動様式、発想の違いが言われたりしますが、小林善彦氏の随想「仲直りのすすめ」は大へん参考になります。

(〇)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(〇三)三二六八二二四(代表)

「文化庁月報」一月号
(通巻第一六〇号)

昭和57年1月25日印刷・発行

編集文化庁

発行所 株式会社 きょうせい
〒脚東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

本社 〒脚東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒脚東京都新宿区西五軒町52番地

電話(〇三)二六八二二四(代表)

辰巻口座 東京 九一六一番

印刷所 協行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五百円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)